

吉野川の歴史(その7)

古絵図によって組立てられた吉野川像

徳島大学 正会員 澤田 健 吉

History of Yoshino River (Part VII)

Figures of Lower Yoshino Expressed on Old Maps

by Kenkichi Sawada

概 要

吉野川の姿を、農民の治水建白書や明治時代の新聞など、資料の種類と手法を変えつつ纏めているが、本論では藩政末期から第1期の治水工事の修了までの間、いろいろな目的で画かれた絵図・地図を見て得たものを纏めた。絵図・地図という視覚的な資料によっているため、以前の文書資料による場合と異なった考察が出来たと思う。

絵図・地図を纏めて論文として報告する場合、作者・製作年代・縮尺精度などを検討するようなアプローチが多いが、本論では江川の締切り・第十堰・西覚円堤・善入寺島など治水工事に重要な地点や有名な地点を取り上げ、その地点において得られる所見を集めた。この方法により、吉野川の特色・吉野川と人とのかかわり合・今の吉野川との相異点などを纏めることが出来た。

最後に絵図・地図による認識がどの辺りまで及び得るか、今まで吉野川以外の川で記憶に残っている、青梅市の成木川と黒沢川・大井川・庄川と小矢部川・筑後川の床島堰の図を紹介した。各河川の一面ではあるが、その点に関しては非常に細かい描写があり、一つの技術のレベルを知ることが出来、また指針として別の図を求める助けにもなる。

(河川、地図、近代)

1 まえがき

“母なる川”という言葉がよく使われているが、その場合でも川そのものは単なるキーワードとなっているだけで、直接記述の対象になっている場合は少ない。川を如何に見るかにより、そこに住む人の品性がわかると言えば言い過ぎになるだろうが、それでもそれを如何に解釈して来たかを知るのは、現在に残る影響の大きさの故に大切である。

その土地が現在見られる形に成るまでに受けた、種々の自然的・人為的営みを知り、単に古人の知恵が現在のそれに比し損色がないと言うような、現在の目で過去の現場を見下すだけでない、現場に対する愛着の起点を求めることは必要である。

このような主題により、吉野川の姿を種々の手法や見方によって把えることを考えながら各方面の資料を集めているが、今回は今迄集めたいいくつかの古

い地図や絵図を資料にして纏めてみた。

本来地図そのものを研究対象とした論文は地理学の文献に多いが、ここで地図を研究対象にするのには、対象に出来る地図の鑑定からはじまり、地図の定義が問題になる。本論ではこのような、地図製作の過程ではなく、形式的には不完全であっても地図として画かれている内容に意味を見付けられるものを、大切な資料として扱ってみた。逆にそうでもない数が集まらない。

地理学の文献に次のような記述がある。¹⁾空間は自然に対する人間の営みの結果であり、具体的位置付けが明確だから外観・景観が記述出来る、このことが大切だと言っている。さらにこのような空間の分析は次の3つの視角すなわち(1)形態と配置および繰り返し、類似性と独自性の研究である形態的分

析、(2) 景観が自然環境に関係するものであると同時に、人間の活動にも関連した多元的な側面を持つという認識に支えられた調査である層位学的分析(3) 変化の速さとリズムとその限界の研究である動態的分析、から行なわれ、且つそれらは互に補いあうべき性質のものである。

そして地図はこの空間に属する諸性質を、それがあつ場所位置付けることによって、空間を形象化し、図式化する表現技術であると考えている。逆に言えば地理空間は場所を確認出来る空間であるから、地図に表現することが出来る。このように地図の持つ意味を説明している。

人為的な営みの結果、すなわち歴史の表現である空間の認識は地図によって得られると言っている。抽象的な表現ではあるが地図には上のような機能があるのを考慮しながら、吉野川流域で現存する地図、特に古地図や絵図の検討を通じて組立てられる、吉野川像を概観したいと考えた。

しかし、このような大きな計画を立てても資料になる古地図は少いので、他の河川の実例を使い、さらに地図以外の資料により既に得られた結論を、地図の上で検証する場合が出るのもやむを得ない。とにかく吉野川の特徴、吉野川に加えて来た人間の力、現在の吉野川と異なる点などを、地図を依りどころとして視覚的に捉えることにした。

地図を使うことにより、文字資料から得られるものと違った側面が見える筈だと思っている。ただ、見えたものを書き表わすことになると、形の上では上述の文字資料の領域への逆戻りになるので、見えたものが書けるかどうかは問題としなければならない。

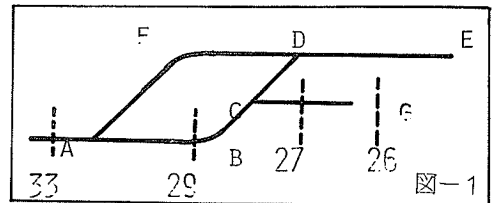
以下本論では記述の方法として、いままで見ることの出来た古地図を検討し、注意を引いた場所や現在の吉野川の形態との関係から注意しなければならない場所を抜き出し、個々に所見を付記することにする。これが集取された古地図の内容を書き表わす場合の一つの方法になると考えた。

いきなり古地図のリストを挙げることも考えられるが、各地図にオーソライズされた題名があるわけではなく、また作成年月に関しても決定的な鑑定が無いので、出来たとしても不完全なものになると思

採らなかった。

2 江川の知恵島における締切り

知恵島附近の吉野川の流路を模式的に書くと図-1 になる。A B C D E が現在の流路、C G が江川、F D は往時は善入寺川と言われた吉野川本流の一部である。なお図中の点線の下にある数字は、吉野川の河口からの距離を表わしている。



現在吉野川では川島Bの下流知恵島Cでかつての江川の分派口は完全に締切られている。しかし県立図書館の所蔵する森文庫中の吉野川絵図(以後これを森吉野川図と略記し、その他もこれに準ずる)、これは天保時代に画かれたとされるが、この時代にはまた締切られていない。この位置の陸地測量部の5万分の1の図は明治29年(1896)測量の図(明治29年旧版図)が一番古いが、この地図になると簡単な堰が設けられ、不完全ながら締切られている。さらに明治30年代に入ると、内務省は吉野川改修工事の準備として吉野川の測量を行ない、大きな図(内務省図)を作っているが、石造の堰があるし堰の下流に堤防も画かれている。

この締切り工事は徳島藩が、天文元年(1736)幕府の御牛伝普請として駿遠国境の大井川で経験した旧流路の締切り工事で良く似ている²⁾ただし同種の工事でも吉野川では150年も後の明治になってからの施工である。

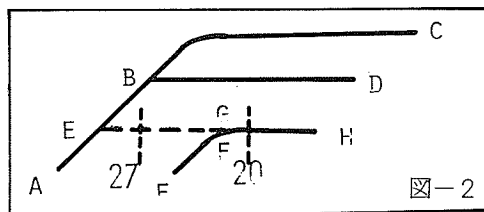
地図の上では以上の経過を見ることが出来るが、いずれにしても、吉野川は北の阿讃山脈から流出する土砂に押され、川島の城山に当るまで南に下る。この形は、水流が大きく反転し北の板野郡に向うか、江川に沿って東流し麻植郡に入るかを分けていて、20km下流の鮎喰川合流点までの水理に与える影響は大きい。

このような南側右岸に割込む流れを遮断する締切りは、流下の途中何ヶ所か確かめられるが、これが右岸の治水方策を決める原点になる。従って締切り

工事の技術的な可能性もさることながら、締切りによる水衝部の移動や農業用水の取得方法の変化などに関して社会的合意を得るのは難かしく、後で西覚円の項で触れるのも一例だが、治水工事の完成までの過程で接衝は争いの種になっている。なおこの右岸の形は左岸の形と大きく違うが、これも詳しくは後で大牛堤の項で述べることにする。

3 鴨島・牛島の堤防

図-2のように麻植郡のこの一帯は一番北を本流ABCが流れ、その南を湧水を集めた江川BDが、さらにその南を支川飯尾川FGHが流れている。江川の南岸堤が明治初年に作られたと記述する文献³⁾は多くあり、現地には短い区間だがまだ完全な断面の残っている場所がある。この旧堤は高さ間・敷巾8間堤度のもので、前にも後にも水の流れはなく、大部分の土は工사용土として削り取られ、跡地は灌漑水路の用地となっているが、上記断面だせば田圃の中に孤立して残っている。



江川自体の流れの巾は、森吉野川図や内務省図では本流の $\frac{1}{2}$ もあり、さらに北岸と南岸の村境は現在の本流の上になく江川沿いに引かれていて、過去に水勢の優位性が江川にあったことを示している。しかしデレーケが明治17年(1884)に行なった吉野川の検査の復命書に付けたスケッチ風の図(デレーケ図)では、書かれたのは上記2つの図の間になるが、その巾は狭くなっている。デレーケは江川の働きを重要視していないとも言える。

それにしても、江川は比較の後まで大河川としての機能を保っていたようで、形が良く残っており、地図を頼にすると種々のことが調べられる。ために現在知恵島以下の一帯の風景から、かつての川中島・中須を想像するのは興味深いことになる。

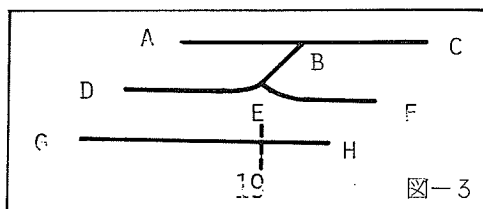
これより古い時代の図は、流れがさらに南にあることを示している。川島の城山の鼻を過ぎるとすぐに向きを東に変え、南の山裾に沿ってEGと流れ、

下流では現在の飯尾川に合致する流れである。鴨島町の分間絵図が公民館にあり、江川と現国道の間に現在の浸水常習地帯と一致する別の河川が画かれている。

扇状地を流れる川が、自然の力と人の力によって流路を変えるのはよく知られている。しかし吉野川は中央構造線の作った狭い構造谷を流下する河川のため、流路の漸進的な移動はあっても、急激な反転は起きにくい。それでも今触れている場所は変化のあった区間で、細かい変化が問題の時は、地方史研究家と言われる人達による聞き取り調査の結果を見ることが出来る。ただ結果としては彼等が同種の地図を画いても、調査の目的は大きく異っており、その成果を如何に利用するかは難しい。

4 西覚円の堤防

この地区の流路の形は図-3の通りで、一番北が本流ABC、江川がDBと本流に合し、神宮入江川がEFと分派、GHが飯尾川となっている。



ここは明治22年(1889)改修工事の期間中、工事中断の原因となる破堤の起⁵⁾きた、治水の歴史上重要な所である。デレーケも指摘した通り、ここはたび重なる無秩序な築堤工事のため河巾が狭ま⁵⁾り、また第十堰以下の勾配のため流れが加速され、好ましくない状態にあった。このため引堤による拡巾を考えたが、途中洪水による破堤を蒙っている。

いずれにしる、はっきりした理論によって工事が導かれたわけではなく、地元の圧力が優先しその場その場の都合で行なわれた築堤の矛盾が露呈した結果と言えなくはない。

工事直前の形を想像させる図もいくつかあり、三木文庫が所蔵する西覚円村図は、村落が中心に在って現在では殆ど消えかけている神宮入江川がはっきり画かれている。しかしこの南岸の様子は明治29年旧版図でないとわからない。この図では高畑の家並部を除いて南岸堤がはっきり画かれているが、昭

和9年旧版図になると環境の変化のために読みとれなくなる。

現地での確認はさらに困難になり、神宮入江川で排ききれなくなった水を飯尾川に落す働きを持ったと思われる石張りの乗越堤が藍畑の西に、芝原では堤防の敷地の跡が耕地の境界線として残っている程度である。高畑の東には竜王団地が作られ、明治初期の破堤の時出来たと言われ、ある期間地図の上に画き続けられて来た池も完全に姿を消している。

現在この神宮入江川の一帯は巾の広い低地で、かつての大きな河道の存在を想像させるが、その中心になる水の流れは小さい。これと家並みの境界は明瞭な一線を画しているが、現地においても地図の上でも堤防の存在を認めることは難かしい。

西覚円の南部の状況に比し、本流B点の前後やB Eの堤防が地図上に画かれるのは遅れている。ここは江川の水が当る場所で、先の西覚円村図には石張りを思わせる表現で堤防が画かれているが、霞堤の形にこの位置で切れている。またこの位置で本流の堤防も切れていて、川の水は完全に放出されている。明治29年旧版図になると、B Eの方は完全に塞がるが、神宮入江川の出口の方は開いたままであり、八ヶ村堤訴訟事件の原因とされている事実が確認出来る。

江川の本流えの放出部の堤防は、第1期の改修完了後の昭和9年旧版図ではもちろん塞がっているが、それまで合流点の河原は、後述の鮎喰川の合流点の河原以上の広大な面積の荒地として画かれているのには興味を持って良い。

現在でも2万5千分の1の地形図で、この位置に10mの等高線を書くと、西覚円・東覚円村の一帯は自然堤防上の孤立した高まりととらえられ、これらを冠水から護る方法を考えるのは、単なる技術だけではない考え方の変化が要求されると思われる。

川を治めるという場合、どれだけの範囲にまで手を着けるかは考える必要のある課題であって、吉野川の場合極端な言い方をすれば、谷巾全体を川とすることも出来る。特に明治29年旧版図の場合河道周辺の荒地の巾に注目すると、その印象が強くなる。流量から必要な川巾を計算し、これを地上にプロットする場合と、現在の地上の状態を見ながら河道を決める過程には本質的に差のあるのが感じられる。

現実には川とされている場所の巾は非常に狭く、川の範囲はあらたまって定義してないだけに、古地図は考えるヒントを与えている。

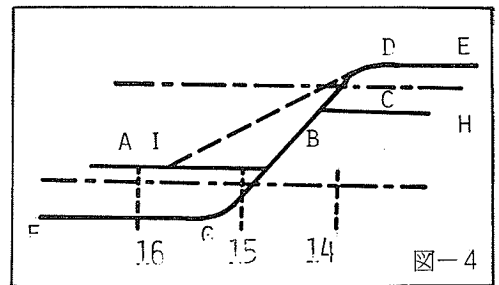
5 第十堰の変貌

第十堰の普請は吉野川における河川工学的な出来事としては最も重要でかつ有名である。しかし当初は簡単な工作物で、今日見る程出来上った形ではなかった筈である。このように思う根拠も地図の上から集めることが出来る。

寛文12年(1671)徳島城の堀に水を引くため、吉野川の水を第十村で分派したが、こう配などの理由から分派口が拡大し、元の吉野川の流量の減少を招いた。このため分派口の水位を上げ流量を確保しようとして作られたのが第十堰である。

この経過は「第十堰出来申伝運記録」⁶⁾に依るが、この時の出来上った堰の形を示す絵図はない。現存する図は幕末になって画かれた森吉野川図・蜂須賀家文書の中の図(蜂須賀吉野川図)・明治29年旧版図・デレーケ図などになる。

これらを纏めて流路を模式的に書くと、図-4のようになる。A B Cが現在の本流、D Eの方向が旧吉野川、F Gが前述の神宮入江川である。Bの東に第十村があり、その北が佐野塚、さらに祖母島になる。鎖線は現在の吉野川の堤防の線である。



昔はAとFの方から流れて来た水はBで合流してDの方向に流れていた。Cの位置からHの方向に流れるのが派川すなわち別宮川で、現在の吉野川本流である。したがってCの位置に第十堰があるが、水流は始めはこの堰に沿って流れ、現在のように直撃する形になっていない。

図面の精度に問題はあるが、古い阿波国絵図では、BとCの位置は、はっきり分けて画いてある。森吉野川図の時代になると、ずれの程度に差はつまるが、

それでもこの2点はまだ別の場所となっている。デレーテ図になると上の2つの点は一点で交差するようになる。なおここで今一つ注目しておきたいのは、神宮入江川の中が本流とくらべられる程大きな巾で画かれている点である。神宮入江川の流れの重要性を暗に含んでいるのだろうか。

明治29年旧版図以降では、G Bの流れは次第に姿を消しA Bの流れが優勢になる。Bで第十村に突当って北に向きをかえ、佐野塚・祖母島を大きく廻って流れるように画かれている。第1期の改修工事が完了した後の昭和9年旧版図になって、はじめて本流は第十堰を直撃するようになる。

最後の変化はD Iの水路を人工的に掘削して、旧吉野川の流れを第十堰より約1 Km 上流の樋門から取るようにしたことである。これは大正末期の工事で、理由は堰の直上の土砂の堆積が取水を防げるからとなっている。ちなみにこの新水路は工事の設計書では運河と呼ばれている。

要するに第十堰の位置は宝暦2年(1756)の始めから不変でも、本流の流路が次第に北に移動し、それに従って第十堰に当る水の影響は変化していることになる。その時々⁷⁾の洪水の被害の復旧だけではなく、堰の働きの変化に対応するため改良を強いられて来たことも考えねばならない。

6 鮎喰川の合流点

ここでは河川の合流点の形を理解する一組の地図を集めることが出来る。一般に河川の合流点の形は今我々が見る程単純ではなく、堤防が完成するまでに手間がかかっている。

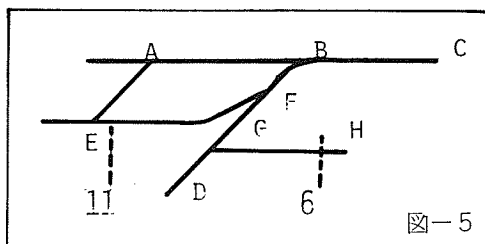


図-5

図-5でA B Cが吉野川の本流、D Bが現在の鮎喰川である。蜂須賀吉野川図にはこの合流点も画いてあるが、合流までの河道の形が複雑を極めてい⁷⁾るのを見ることが出来る。なおD G Hと流れて本流に合流していない時のあったのも考えられるし、流水

の一部は本流に入っても鮎喰川を一つの独立した川と扱っている徳大図書館の鮎喰川図もある。

蜂須賀藩は藩政初期城下町を護るため、所謂蓬庵堤をGの位置に築いており、藩政末期ではあるが破堤の修復に力を入れ、住民がこの処置を感謝した話が、堤防上の石碑に書き残されている。現在これらの努力の跡が二重堤の形を持って残っている。

E Fは飯尾川で一度鮎喰川に合流している吉野川の二次支川だが、明治29年旧版図では直接本流に合流する一次支川になっている。現在では直接合流する水路は、飯尾川の放水路として5 Km 上流にE Aと掘削されている。

さらに細かい流れを拾うと、右岸だけでも新町川の水源になる流れなどB CとG Hを結ぶ流れが網目状にこの地を覆っている。対岸には別宮八幡神社前に斜めに吉野川と交わる堤防があり、これに沿って流入する川を現況と比較出来ぬくらい大きく画いた三木文庫の応神村図もある。明治3年(1870)の日付けがあるが、言い伝えと同様現況との間に大きな違いがあり、変化の速さと共に合流の影響の大きさを物語っている。またこの地が諸河川の洪水の集中地であることもわかって来る。

ここで纏めたいのは、この附近の河道の形が後々まで決まらず、また広大な砂州を残していることである。また明治29年の旧版図では、鮎喰川の堤防は現在の吉野川本堤の1 Km 以上も手前で終っており、内務省図でも合流点は2×1 Km²の大きな州のまゝの表現になっている。昭和の初めに敷設された高德本線が、ちょうどこの砂州の西側を迂回する形になるのが地図を重ねるとわかって来る。

いづれにしろ、大正時代まで合流点には広大な土地が荒地として残っていたわけで、逆にこれで現在の如く整形された合流点とは異なる、自然の河川の合流の実態を見ることになる。同時に、知恵島の江川の締切り地点で始まった右岸整備の努力が矛盾として最後にこの合流点に表われて、住民の困惑の姿を見ることにもなる。

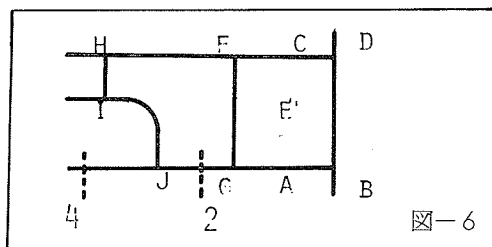
7 新町川河口の埋立

古い絵図で見ると現在徳島の町と言われる場所は、安定した地盤ではなく、河口の砂州のような所が多い。このような状態は西から東に向って目立って来

て、徳島市史編纂委員会が纏めた徳島城下町図などでもいろいろな段階のあるのがわかる。

多くの島が橋でつながれ、図の中央に城山があるという形で特長付けられ、さらにその間には川とは言えない広い水域がある。徳島市には現在でも、後に島・浦・浜の字の付く地名が多く、現在の海岸線よりかなり内側にまで分布している。

この意味で三木文庫の中にある沖州図は面白い。図一六のように、津田浦Aと新町川河口Bから小松新田Cと別宮川河口Dの間を、海岸部から末広大橋の位置ぐらまで画いている。先端に沿岸砂州Eが発達していて、その内側の水面は河川の排出する土砂で埋められている。しかしその作用が今一つ完成せず、現在の沖州川F Gと大岡川H Iさらに住吉川I Jの周辺は巾の広い水域として画かれている。なお末広大橋はJの位置にあることになる。



この図がいつの時代の図か不明であるが、画かれている図面の細かさからみて、それ程古いものとは思えない。明治29年旧版図になると、水域の巾はいくぶん狭くなり、沖州川の位置では埋め残した水域は川らしくなるが、現在の北沖州の中央市場やフェリー乗場附近の港の施設など、公共施設の立地する場所には水域が残っている。

ちなみにこのような風景は、明治29年旧版図によると旧吉野川や今切川河口一帯、さらに那賀川河口一帯にも共通に見られ、現在の海岸構造では見れなくなった風景を偲ぶ手段になる。

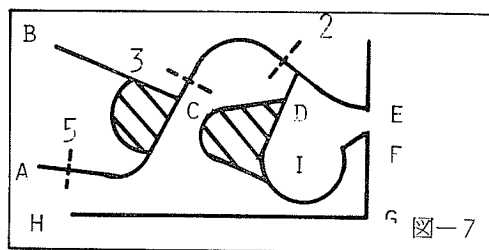
要するに自然の営みの結果出来た浅い水域が最後に陸化するのは人の営みによるわけで、この段階では変化は非常に早くなる。沖州一帯も、金沢新田や末広新田の開発を経て順次陸化が達成されたが、沖州図からこの時の水辺の様子がうかがえる。

8 中喜来・笠木野の新田開発

ここでも吉野川下流の沖積地における新田開発の

過程、すなわち海岸砂州の背後の湿地や河川合流点の広い水域が自然的に浅くなり、ここを少しずつ囲って段階的に水田面積を拡げ、終に対岸との間に狭い水路を川として残すに至った過程が追え、下流部での河川形成の機構を知ることが出来る。

図一七は旧吉野川A C D Eの河口近くで支川大谷川B Cと、旧吉野川河口堰と合流点間A Cに挟まれる中喜来村の絵図と、対岸の入江E D I Fの沿岸D Iに面した笠木野新田の絵図のスケッチである。なお現在の徳島空港はこの位置にある。



現在大谷川は中喜来で上流からの巾を維持しながら吉野川に流入しているが、この図では合流点の川巾は三角形に大きく拡がっている。明治29年旧版図の場合でもこの状況は変わらず、昭和9年旧版図で初めて塞じている。ただこの三角形に開いた場所は常時水面であるわけではなく、あし・よしの茂る不耕地で、これを表現した図は同じ三木文庫にも吉野川広戸口図など何枚もある。

自然現象としての変化の過程の最後の一瞬に人力による仕上げを行なう、このタイミングのとり方を当時の技術として再認識しなければならない。以前本報告の(その4)⁸⁾でも吉野川中流部で河川堤防を作るのに、木を植えその周囲に砂が付くのを待ち、頃を見て堤防の整形仕上げにかかるのを上策だとした当時の考えを紹介したが、通じ合う話である。

絵図によると締切堤の施工法は、堤線の両側の地盤を掘り起し、中央に集め盛り上げる方法が採られていて、その裾は石を張って保護上には松を植えるのが標準のようである。しかしこれ以上に細かい構造を示す図は見付からない。水田の開発技術には別に用水の確保という、むしろこちらの方が大切かも知れない問題もあるが、ここでは触れない。

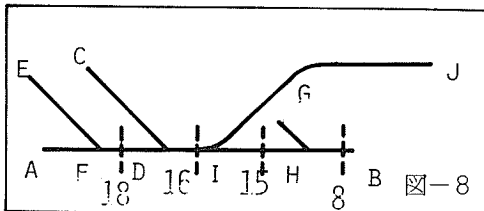
一方笠木野新田の開発の絵図には今少し詳しい表現がある。旧吉野川A Cと今切川H Gの自然堤防と長浦の海岸砂州F Gの間に残った水域の一部をD I

で締切って開発を行なっている。締切り堤は石積み
の様に画かれていて、中央には排水樋門があり、堤
防の前面には締切り堤の保護のためか捨石が並べて
ある。また海岸砂州の背後の水面と旧吉野川の流れ
の間には杭を並べた導流堤がある。

これらの時代の水際線はまだ何らかの形で残って
いて、古絵図の上の表現を現地で確認する助けにな
る。現在は堤防としての形はないが、かつての位置
を示す松並木は部分的に景観として残っている。堤
体は長い間の地盤の圧密や地震時のゆり込みで沈下
しても、外廻りの堤防が完備し修復の必要がなくな
っていたため放置され、一方堤内の耕地は排水の必
要からそのつど嵩上げされたため、堤防と耕地の高
さの差はなくなっている。

9 大牛堤の機能

図-8において大牛堤C Dは北岸から流れ込む小
水路に沿い、六条大橋の位置で斜に本流A Bと交わ
る堤防である。川島の城山に当って北側に刎ね上
った水勢から、北岸を護るため流れの向きを変えよう
とし、村単位で作り重ねて来た堤防の一つである。
霞堤に似た形だが厳密に計画して作ったものでない
と考えて良いであろう。



現在形を残している一番大きな堤防として、これ
を取り上げたが、明治29年旧版図では他にも幾つ
か同種の堤防の存在が認められる。高瀬橋の北詰め
にも同形の堤防E Fが、旧吉野川I Jを分派した後
中原に堤防G Hが、旧吉野川にも中富に同種の堤防
を見付けることが出来る。さらに現在は堤防の中に
埋め込まれていても、過去に同等の働きをした堤防の
在った置を地図上に推定するのも容易である。

上流になると扇状地の先端の崖が、この堤防と同
じ役を果たしている。阿波町の大内家に所蔵される伊
沢村の絵図、この間の川の姿を詳しく画いた伊沢村
の河原の図、また協町の図書館にある同種の図で水
が扇端の崖に当って反転する様子が確かめられる。

なおこの北岸一帯は、例えば建設省の治水地形分
類図によっても多くの河跡のあるのがわかるが、本
論では150～200年程度以降のことを問題にし
ているので、流路の北岸は基本的にはこれらの堤防
に依って固定されていたと考えたい。蛇行している
流路の水衝部の村々が、堤防を作って水の衝撃から
自村を護るのを専らに考えていたと思われる。

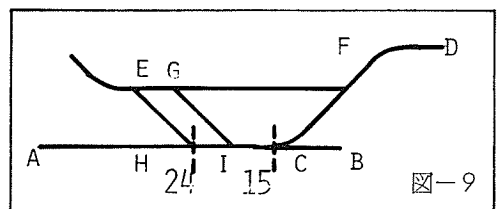
この対応が明治以降、種々の手だてを構じて河道
を整理した南岸と異なるのは明らかである。多くの
霞堤の形をした堤防が存在するが、これらは通常考
えられているより重なりが少なく、全体的な計画の
下に作られたとは言いにくい。しかし逆に他の河川
の霞堤の場合も最初は、この程度の現実の下に築か
れて、後になりその効果が認められてから形が整え
られたと言えないだろうか。

徳大の図書館に那賀川の下流部分を画いた長川図
があるが、堤防は各村々ごとに切れていて、村々が
力に応じて堤防を作ってきた様子がうかがえる。

10 宮川内谷川の改修

宮川内谷川は北岸の大きな支川の一つだが、多く
の支川の中にあっているいろいろな意味で特長を持った
存在である。すなわち河川の一つの型を知る意味で、
関連する地図は大きな意味を持っている。

図-9のように山間部から扇頂に出て来た河道は
E G Fと大きく東に向をかえ、他の支川のようにE
Hと真直に南流して吉野川の本流A Bに合流してい
ない。南流していた過去を示す土成村の絵図もある
が、建設省の治水地形分類図にはこの事実を証明す
る記載はなく、一般的な説ではない。



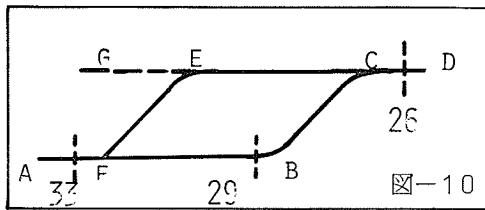
扇頂Eでは川巾が100mもある河川が、その後
は扇状地の中に深く切れ込んで、巾の狭い深い川に
なる。扇状地を離れてから旧吉野川C F Dに合流す
るまでは沖積地の上を流れる天井川となり、川巾も
極端に狭くなる。旧吉野川との合流点Fでも他の支
川の古絵図に見られる大きな河原を欠いている。こ

これらの条件が重なって一帯が水害の常襲地区になっていたのは容易に理解出来ることである。

一方このような状況は河川工事の計画を非常に難かしくし、上下流問題と言われるような利害がからんでくる。ここでG Iなどの折衷案が出されたが、結局一度認められた国の補助を返上し、工事史上に話題を提供することになる。⁹⁾

11 善入寺島の遊水池化

図一10のB C E Fの部分が悪入寺島で、吉野川の第1期改修工事が行なわれた明治時代に遊水池化が決定し、以後大きな変 化をとげている。したがって明治29年旧版図は変化前の姿となり、その後の地図の変化を追うのは、興味深いことになる。



前の時代の森吉野川図では島の南部を流れる本流A B C Dと、当時善入寺川と呼ばれた北部を流れる分流F E Cの巾は殆ど同じで、明らかに島とみなせる書き方である。しかし明治29年旧版図では、善入寺川は吉野川の支流のようにG E Cと画かれるので島の形をしていない。またその後の内務省図でも善入寺川は、水筋の連続性がはっきりせず明治29年旧版図程ではないが、一本の支川が確認出来るような書き方がしてある。この後で吉野川の南岸・北岸に本堤が作られて堤頂の高さが善入寺島の地盤高さを越すことになる。

明治時代に島になることが決定したとはいえ、単に河川構造物により島を護らないと言うだけで、自然の成行にまかせていたために、実際に島らしくなるのにはそれ相当の年月を必要としている。島の周辺の水害防備林などは簡単に消え去る筈はなく、今日もその形は残っている。

地図上で目立つのは、明治29年旧版図にある村が次の図では完全に消えている点である。遊水池化が決定し国が土地を買い上げる事務処理の問題だから当然だが、特徴的な記録である。善入寺島の下流端に相当する位置に以前和平塚と呼ばれた村があり、

そこを画いた風景画風の屏風絵が残っているが、これも同じ意味で遊水池化の貴重な記録と言える。

12 補足的な実例

これまでに集めた地図の整理を試みて来たわけで、個々の地図の検討により新しい力学的な発見はないが、吉野川の変化の様相や旧跡の保存の状態に関し認識を深めることが出来た。

次に絵図・地図から知り得る過去の姿はどの辺りまでか、筆者が今まで見た吉野川以外の図から、内容の独自さで表現の限界となるように思えた例を2・3あげてみる。吉野川に関してまた見ていないものは多い筈で、これを探す時の指針として他の川の例を使いたいと考え気を付けていたものである。

第1にあげるのは、今は東京都青梅市に入る旧富岡村の絵図¹⁰⁾である。寛保2年(1742)から明治3年(1870)の間に繰り返された川除普請の絵図が12枚保存されている。場所は荒川の支流入間川の支流である成木川と黒沢谷川の合流点で、初期の杭打ちを主とした工事から、後に杵工を主とした工事への転換の過程が読みとれる。

吉野川筋では沖州図や笠木野新田図にこのような、河川構造物の書き込みがあるが、杭打ちの導流堤を見る程度である。知恵島の締切りや第十堰の建設などの大規模な工事の詳細な図があれば、技術史の現場として吉野川を見るのに大きな助けになると思われるだけに、富岡村の絵図は貴重である。

水制や杵などの構造物の記載された絵図は少ないが、広い範囲の堤防の位置を示す図は時々見ることが出来る。その中に幕府が享保の時代行なった大井川の旧流路の締切り工事の図¹¹⁾がある。この普請は徳島藩と南部藩が御手伝に出ていて、古堤や新堤の位置を示す図やその時使った工所用材料を細かく書き出した文書が蜂須賀家文書として残っている。筆者はこの文書の概要を紹介し、吉野川の第十堰の建設の動機に何らかの影響を与えたのでないかと考えてみた。

富山県新湊市の高樹文庫にある絵図の中の、庄川小矢部川合流点附近の堤防を画いた図も面白い。特に堤防工事で御手御普請所と御郡用水御普請所が普請ヶ所が区別して画かれているのは、取り合いの実状の一端を知る上で興味深い。西覚円を中心とした

一帯は問題の多かった所だけに、この種の決定的な図の出るのが期待される。

筑後川で久留米市の上流にある床島堰の絵図も忘れられない。筑後川を堰き上げて農業用水路に水を流す3つの床の総¹²⁾だが、一番大きい恵利堰が第十堰よりいくらか短い程度で、機能的には両者は全く同じである。まだ原図¹²⁾を見ていないが、床島堰開発史展を開いた時の図録にある多くの写真によると、そこには堰の形が詳細に画かれていて、特に宝歴や安政の図は見ごたえがある。吉野川の第十堰に関してもこれだけの図が期待出来ると面白い。

13 あとがき

土木史と言っても、そこで何を論ずべきか、また現在の議論のどこに問題があるのか良くわからない。住民の側で何を作りたいと思ったか、作れると思ったか、その動機を書き出すことが可能か否かに強い関心を持っている。というのも、このような考察を進めると最後に土木技術という色を失う恐れを感じるからである。

また産業考古学の本を読んでも、古いものは良いものだとゆう理解以上に、古いものでも良いものとそうでないものがあるのかいなか、区別するヒントは見付けにくい。このため吉野川の堤防など古い治水施設を文化遺跡と捕えようとしても、これが先祖の血と汗の結晶だからと言う以外の言葉がない。なぜとせまる次の質問に答えることが出来ない。

実学は西洋合理主義を受け入れる基礎となった地下の学問意識という定義がある。そして実学を実践した前述の高樹文庫の石黒信由は和算家として出発し、地図を編集し、新田開発・河川改修へと進む開発の基礎を作ったことで評価されている。こうゆう発展の線上の最初に位置づけられることのある地図だから、地図を元に吉野川の姿を画くことが出来るかもしれないと努めてみた。資料の不足を先入観で補った部分もある。まとまりのある文章になったとは言えないが、一つの視角とってもらえれば幸である。

参 考 文 献

参考文献としては、本論文で資料とした絵図・地図の出所を一括してあげるべきかもしれないが、本文の中で述べたように出所は多岐にわたっており、その作業は実りのないものと思われた。この代り本文の中で資料を引用するたびに、その出所を明らかにするよう努めたので、これで代えさせてもらいたい。したがってここで参考文献として紹介するものは、文献として発表されているものにかぎられる。

- 1, O・トルフス "地理空間" 文庫クセジュ PP 9, 28, 115 '75
- 2, 澤田健吉 "徳島藩の大井川御手伝普請" 徳島科学史雑誌 NO 5 PP 31~36 '86
- 3, 石田園坡 阿波近古史談 徳島県出版文化協会 PP 195~198 '73
- 4, 上田利夫 "吉野川の歩み" 徳島県染織協会 PP 6~18 '85
- 5, J・デレーケ "吉野川検査復命書" 1884
- 6, 小川国太郎 "川内村史" 川内村役場 PP 453~459 '37
- 7, 内務省吉野川改修工事々務所 "吉野川高水防禦工事に関する書類" '18 県立図書館蔵
- 8, 澤田健吉 "吉野川の歴史(その4)" 土木学会 日本土木史研究発表会論文集 PP 19~26 '84
- 9, 町史編纂委員会 "上板町史 下巻" 上板町役場 PP 675~723 '85
- 10, 木村東一郎 "近世村絵図研究" 小宮山書店 PP 121~149 '62
- 11, 2に同じ
- 12, 久留米市立草野歴史資料館 "床島堰開発史展" PP 30~31, 49~58 '85
- 13, 新湊市教育委員会 "石黒信由" PP 38~46 '85